夏季ミニ展示　田原本の遺跡 Ⅵ

秦楽寺遺跡

JINRAKUJI SITE

唐古・鍵考古学ミュージアム
KARAKO-KAGI ARCHAEOLOGICAL MUSEUM
2010.8

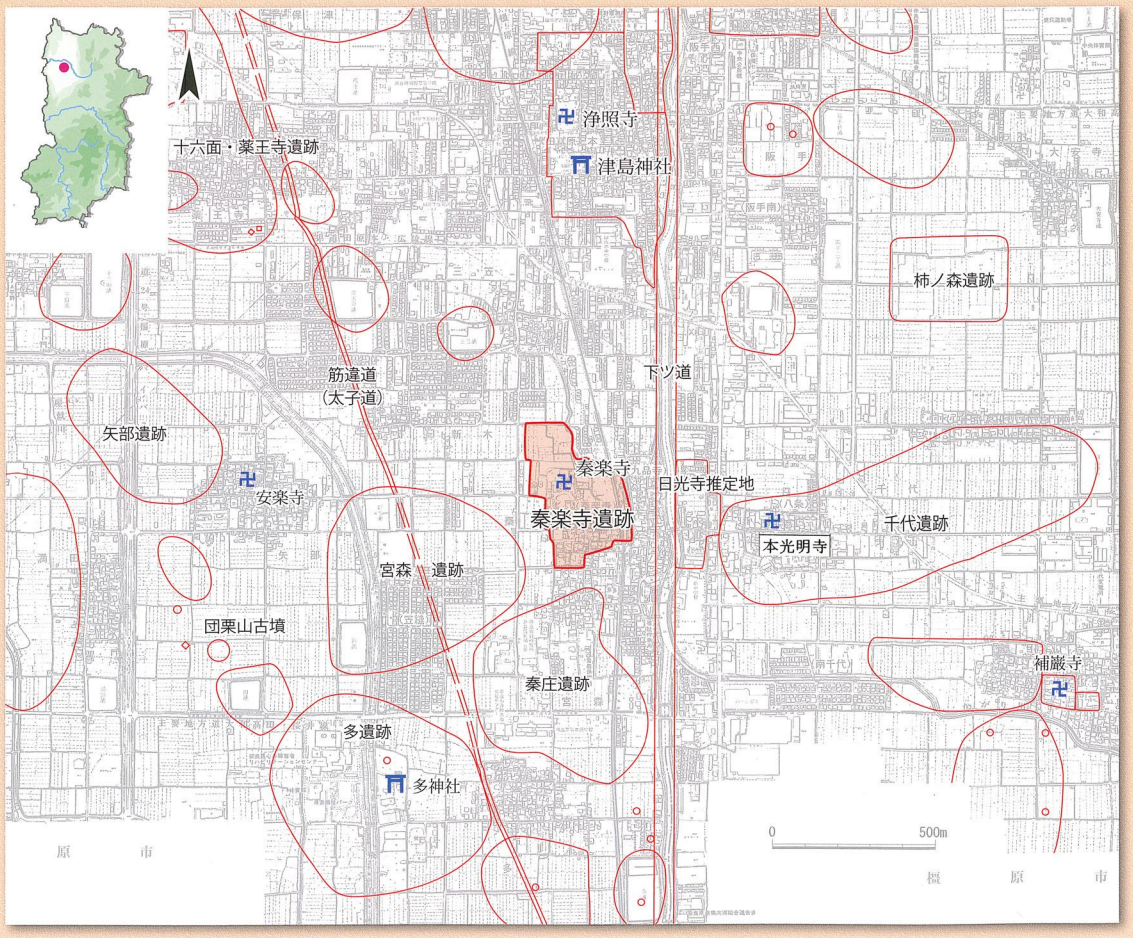
秦楽寺遺跡とその周辺

秦楽寺遺跡が存在する田原本町の南部には、弥生時代から古墳時代の集落遺跡である多遺跡や秦庄遺跡、日光寺推定地、馬具や須恵器など豊富な副葬品が出土した団栗山古墳などが点在しています。特に団栗山古墳の周辺では、削平された小墳丘が残存しており、古墳群を形成されていたようです。また、下ツ道や筋違道（太子道）も近くを通っており、原始から古代・中世にかけて濃密な遺跡分布を示している地域です。

秦楽寺遺跡は、現在の寺院「秦楽寺」を中心に拡がる中近世遺跡と推定されていましたが、近年の発掘調査で古墳時代の玉作り関係の遺物が出土し、玉作り集団が居住していた集落も重複していることが判明しました。

平成19・20年度、秦楽寺池の護岸工事に伴い、第３・４次調査を実施しました。秦楽寺の北西側にあるこの池は、江戸時代中期に築造された池であることが近世の絵図から推定できますが、調査ではそれ以前の中世秦楽寺城の遺構と思われる濠や井戸の他、古墳時代の土坑（穴）や小溝、柱穴などを多数検出しました。

古墳時代の地形は池の南西側が高く北東側が低くなっており、古墳時代の遺構はこの微高地域に多く分布していました。また、秦楽寺の南側でおこなった第１・２次調査では、古墳時代の遺構・遺物が見つかっていないことから、玉作り集団の工房域は秦楽寺池西南隅から南側の公民館付近が中心であったと推定できそうです。



田原本町南部のおもな遺跡と寺社（S＝1/20,000）

池西側の調査区全景（第３次）

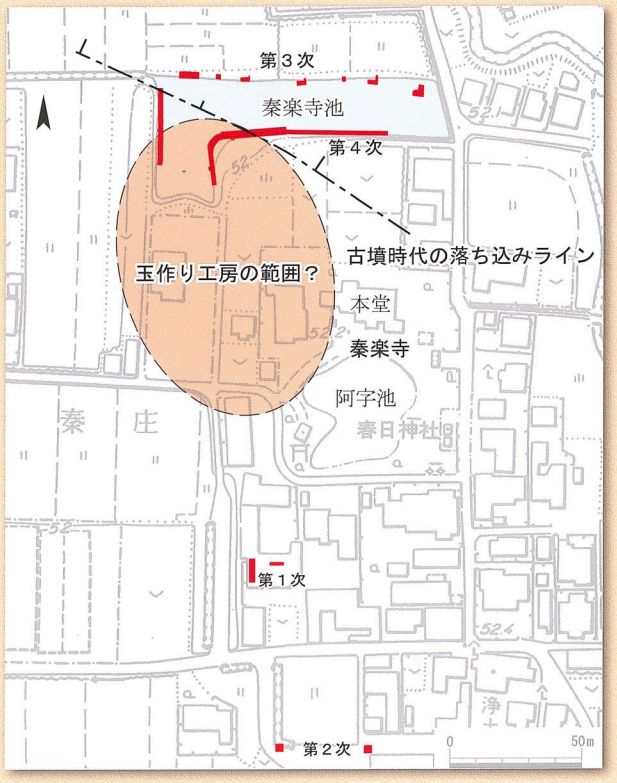
池南側の調査区全景（第４次）　写真右奥の建物は秦楽寺

古墳時代の溝・土坑（第３次）

古墳時代の柱穴・小溝（第４次）

古墳時代の須恵器と韓式土器

古墳時代の製塩土器



調査地と玉作り工房の推定範囲（S＝1/2,500）

滑石製臼玉とその未成品・剝片

古墳時代の玉作り工房

秦楽寺遺跡から出土した玉類の特徴は、滑石や琥珀、碧玉、緑色凝灰岩、メノウなどさまざまな石材で作られていることです。特に滑石製品が多く、この石材は兵庫県朝来付近から採集されたものです。この他の石材の産地としては、碧玉、緑色凝灰岩が石川県小松付近と推定されています。

玉の種類としては滑石製臼玉が最も多く、玉製作の基本であったのでしょう。素材片から荒割→形割→穿孔→研磨→完成品といった各工程の未成品・失敗品があり、臼玉の製作過程をたどることができます。

玉類の未成品や剝片の他にも、玉の研磨に使用した砥石も出土しました。玉砥石には、中・大形の置き砥石と、小形の手持ち砥石があります。これらの砥石は橿原市耳成山や畝傍山で産出する流紋岩製のものが多く、遺跡の近くで採集できる石材を砥石に使用していたようです。

奈良県内の玉作り遺跡は、橿原市曽我遺跡をはじめ約20ヶ所が知られていますが、秦楽寺遺跡では、琥珀製品が多く作られており、この遺跡の特徴といえるでしょう。

滑石製勾玉・有孔円板・管玉とその未成品

琥珀製丸玉・棗玉とその未成品・剝片

碧玉・緑色凝灰岩製管玉とその未成品・剝片

出土した玉類（第４次）

玉砥石

ガラス玉

不明鉄製品

秦楽寺の創建とその後

現在の秦楽寺山門

土蔵門で中国風の造りをしており、あまり例を見ません。門前にはかつて、金春座（円満井座）の屋敷があったと伝わります。

現在の秦楽寺本堂

棟札から宝暦九年（1759）に修復された建物です。堂内の形状から、護摩堂から本堂に転用された可能性が考えられています。

『秦楽寺略縁起』によれば、大化三年（~~648~~ 647）に秦（はたの）河勝（かわかつ）が建立し、聖徳太子から下賜された観音像を本尊にしたと伝わります。

大同二年（807）には空海が『三教指帰（さんごうしいき）』の一書を当寺で執筆し、阿字池を築造したといいます。当時は天台・真言宗の僧坊が棟を並べていたとされ、顕密二教の霊場でした。

これまでの調査では秦楽寺の創建年代を示すものは出土していませんでしたが、8世紀後半頃の柱穴が見つかったことから、この時期以降に寺院が存在したことは確実です。

木造秦河勝坐像（秦楽寺所蔵）

本尊脇に安置されています。台座には明暦元年（1655）九月十四日の銘文があり、江戸時代初期の作とみられます。

河勝は申楽の祖とされ、能の大成者・世阿弥は自らを秦氏（秦元清）と称しました。

柱穴と出土した土器（第4次）

柱穴の底には小さな礫（れき）が敷かれていました。
土器は奈良時代末期のものとみられます。

須恵器坏

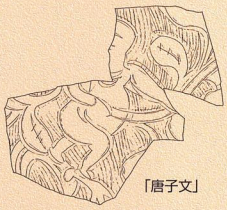
内面には赤色顔料が付着しています。また、割れ面を漆で補修しています。

井戸から出土した土器（平安時代、第３次）

木枠をもつ井戸（室町時代、第４次）

15世紀以降、秦楽寺は城砦化したと考えられます。『二条宴乗記』には「秦楽寺城」の名が見え、松永久秀により攻略されたことが記録されています。また、『秦楽寺略縁起』にも現在の本堂と山門（楼門）以外の建物が兵火によって焼失したとあります。発掘調査では、これを裏付けるような濠跡や焼けた瓦などが出土しています。

中世の遺物で特に注目されるのが、中国の景徳鎮窯で焼かれた13世紀前後の「青白磁唐子草花文梅瓶」です。この梅瓶は細長い胴部下半のみですが、日本の中世遺跡から出土した唐子表現のあるものとしては大変希有な資料です。秦楽寺の住人がどのようにしてこれを入手したかは課題ですが、威信財として梅瓶を保有していたことはこの遺跡の重要性を示しています。



「唐子文」

青白磁唐子草花文梅瓶

南宋代・景徳鎮窯のもので、漆による補修痕があります。

（永禄十三年九月）※1

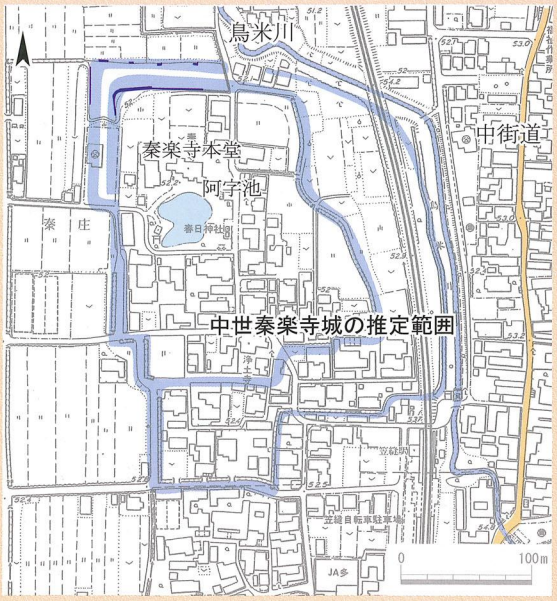
廿八日　天晴。我等、今度不慮滞留申付。祝ニ春日殿へ女房飯用意候て参。御所へアカ飯一重進上。善四郎信貴ヨリ帰。城州ハ秦楽寺城ニ御出由、十市郷之」（オヒ）不隋在所可被焼捨由被申付由。

二十八日　天晴る。我等、今度不慮の滞留申し付けらる。祝いに春日殿へ女房飯用意候て参る。御所へアカ（赤）飯一重進上す。善四郎信貴より帰る。（松永久秀）城州は秦楽寺城に御出（おいで）※2の由。十市郷の随わざる在所焼き捨てられるべき由、申し付けられる由。

『二条宴乗記』の記載

※１ 永禄十三年（1570）四月、元亀に改元
※２「御出」…攻める、の意

出土した瓦と焼けた瓦



近世集落絵図から復元した秦楽寺城の範囲（S＝1/5,000）
北西隅が近世溜池「秦楽寺池」

■ 発掘調査で確認された濠跡
■ 推定される濠跡・河跡

秦楽寺池

秦楽寺の北西側には逆L字状の農業用の溜池があります。この池は、江戸時代中期の集落絵図にはなく、その場所には中世秦楽寺城に伴うものと考えられる二重の濠が描かれています。

享保十四年（1729）、秦楽寺と九品寺の両村から、溜池新設の請願がなされました。池の築造にあたっては、内濠と外濠の間の中堤を撤去し、一体化した池の形としました。

（宮本 誠1984「田原本の溜池」『田原本の歴史』第３号、田原本町）

紙本白描方広寺大仏再造画

秦楽寺には、2,420枚の和紙をつなぎ合わせて高さ９ｍの大仏を描いた大仏図が残されています。裏側には、文化三年（1806）に僧・恵実が京都方広寺の大仏の再建を願った発起文が貼り付けてあります。

日本三大仏の１つに数えられていた方広寺の大仏は、寛政十年（1798）、落雷により焼失しました。この再造画は大仏の再建・勧進のために描かれたと考えられています。恵実の勧進が実際に実を結んだかどうかを示す資料は残っていませんが、方広寺では天保十四年（1843）に上半身像が再建されました。

（田原本町1980『近世白描方廣寺大仏再造画の考察』）

秦楽寺遺跡・秦楽寺略年表

時代	西暦	事　項	おもな遺構	おもな出土遺物
弥生		集落？		石鏃
古墳		玉作集落が営まれる	土坑・小溝・柱穴 流路	土師器・須恵器・玉作関連遺物 ガラス玉・韓式土器・製塩土器
飛鳥	647 ~~648~~	秦楽寺創建（『秦楽寺略縁起』）		
平安	807	空海、『三教指帰』の一書を執筆、境内に阿字池を築造（『同略縁起』）	柱穴	土師器・須恵器
		本尊・千手観音像立像（平安時代中期）	土坑・井戸・溝 小溝	土師器・瓦器 梅瓶
鎌倉	1223	『三箇院家抄』春日東塔供田結番注文のうちに「秦楽寺」		
	1347	興福寺造営料大和国八郡段米田数注進状の一条院方に「秦楽寺」		
室町		（この頃に「秦楽寺城」形成か）		
	1570 〜 1596	秦楽寺焼失？『二条宴乗記』の記載 元亀〜文禄年間『多聞院日記』にたびたび「秦楽寺意斎」の名が登場	土坑・井戸・溝 濠	土師器・須恵器・瓦器・中世陶器・瓦
	1729	溜池（秦楽寺池）新築の請願書	池・溝	近世陶磁器・瓦
江戸	1759	僧恵海、秦楽寺の堂宇を再建		
	1806	僧恵実、方広寺大仏の再興を発願		

平成２２年度　夏季ミニ展示「秦楽寺遺跡」　期間 2010.8.7 ～ 9.30
田原本の遺跡 Ⅵ

発行日／2010年８月７日　　発行／田原本町教育委員会
編集／唐古・鍵考古学ミュージアム　〒636-0247　奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1

・展示および図録の作成にあたっては、下記の団体ならびに個人の方からご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。
秦楽寺、秦楽寺自治会、鋤柄俊夫（同志社大学）、谷山正道（天理大学）、土橋理子（奈良県立橿原考古学研究所）
写真　佐藤石文